

2015年度JCAS 次世代ワークショップ (ボーダースタディーズ枠)

企画責任者：モハメド・オマル・アブディン、橋本茉莉

# 領土の再編と地域研究

## -南スーダン独立後「スーダン地域」再考の試み-

共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、科研費基盤研究(A)「ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築」

### ■日時・場所

2015年12月18日(金)

13:00-18:00

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

マルチメディア室 (304) にて開催

### ■ワークショップ参加者

・ 発表者5名

・ コメンテーター(栗本英世先生)

・ アドバイザー(苅谷康太先生)

・ 傍聴者 約30名

### ■プログラムおよび登壇者 (敬称略)

1. 開会の辞 13:00

2. 苅谷康太(東京外国語大学AA研、アドバイザー)

「企画説明」および岩下明裕先生からのメッセージ代読 13:00～13:05

【報告1】 13:05～13:50

3. モハマド・オマル・アブディン(東京外国語大学)、橋本茉莉(日本学術振興会/九州大学)  
(趣旨説明) 「領土の再編と地域研究：南スーダン独立後「スーダン地域」再考の試み」

4. モハマド・オマル・アブディン

「南スーダン独立後の政治的対立と新たな紛争：国際関係と国内情勢の変化」/スーダン共和国を中心に

5. 村橋勲(大阪大学)

「南スーダン独立後の政治的対立と新たな紛争：国際関係と国内情勢の変化」/南スーダン共和国を中心に

<質疑応答>

【報告2】 14:00～14:50

6. モハマド・オマル・アブディン

「体制によるスーダン人アイデンティティ再構築の試み：南スーダン独立後のバシール大統領の演説に着目して」

7. 飛内悠子 (日本学術振興会/大阪大学)

「移動から生まれるローカル性：南スーダン独立後におけるハルツームのイメージを巡って」

<質疑応答>

【報告3】 15:00～16:30

8. 村橋勲

「南スーダン難民の移動と活性化する経済活動：ウガンダの難民居住地と国境におけるマーケットの拡大」

9. 橋本茉莉

「難民居住地における社会組織の再編：南スーダンの国内避難民キャンプとウガンダの難民居住地の事例を中心に」

10. 仲尾周一郎(日本学術振興会/京都大学)

「領土の再編と言語史の再編：南スーダン・アラビア語クレオールの場合」

<質疑応答>

11. 栗本英世(大阪大学大学院) コメント 16:30～16:50

12. 総合討議 17:00～17:55

13. 閉会の辞 17:55～18:00

### ● ワークショップの目的

本ワークショップでは、南スーダン独立に伴う国家領土の再編以後、スーダン・南スーダン地域が抱えている諸問題の変化と連続性について多角的な観点から分析を試みました。国際関係や経済活動をはじめ、難民のアイデンティティや社会組織、言語などの幅広いテーマから地理的領域にとらわれない「地域」のあり方を再検討し、領土の再編と地域研究、そしてスーダン地域の紛争解決・平和構築の可能性についての議論を行いました。

### ● 各報告の概要

・ 2011年前後のスーダン地域の国内情勢・国際関係に焦点を当てた〈報告1〉では、南スーダン独立以前・以後のスーダンの政党間の対立関係や中東地域との関係、2013年の南スーダン内戦以降複雑化する紛争主体の動態が明らかになりました(アブディン・村橋)。

・ 〈報告2〉では、スーダン共和国に焦点を当てた発表が行われました。スーダン共和国内の政治危機と地域不安定化については、スーダン地域の政治的・経済的危機が現バシール体制の崩壊ではなく、むしろ体制の安定に貢献している可能性が指摘されました(アブディン)。首都ハルツームに暮らす南スーダン出身者の動態については、長期の避難生活とスーダンの首都ハルツームという都市空間のイメージの変遷、それに伴う人々のアイデンティティ形成過程の一端が報告されました(飛内)。

・ 〈報告3〉では、2013年末に生じた南スーダンの内戦によって発生した難民の経済活動(村橋)と社会組織(橋本)、そして南スーダンのアラビア語クレオールの言語史(仲尾)など多様な観点からの報告が行われました。村橋発表では、2013年以降にウガンダに逃れた南スーダン難民と地域住民が経済的に相互依存的な関係にあるが、難民同士の新たな社会関係や対立が生まれていることが示されました。橋本発表では、南スーダンとウガンダの難民定住地で発達した社会組織の構造と機能を明らかにされ、それらの組織が難民間で生じる諸問題の解決機構となる可能性が指摘されました。仲尾発表では、南スーダンを代表するアラビア語変種であるジュバ・アラビア語の歴史から、1世紀以上の間ジュバ・アラビア語の文法構造や社会的機能に本質的な変化が見られないこと、そしてそれが南スーダン独自の歴史観の形成にとって重要な役割を担うことが指摘されました。

### ● コメント

大阪大学大学院の栗本英世教授によるコメントでは、まず各発表に対する疑問点や課題が指摘されました。そして企画全体に対しては、2011年以降の現象を理解する上でのCPA(包括和平合意)期(2005-2011)の重要性、さらに「2つのスーダン」(Sudans)の文化と歴史の問題を内包するクレオール・アラビア語を取り上げた仲尾氏の発表が本企画の趣旨にとって有する意義が指摘されました。

### ● 総合討議

傍聴者を交えた総合討議の中では、南スーダン独立前後という短期的な視野で問題を捉えるのではなく、スーダン地域の長い歴史の中で現在の問題を捉え直すことの必要性、平和構築に関する研究者、援助関係者、政府関係者それぞれの持つ役割、ボーダースタディーズに対してスーダン地域研究が貢献しうる点などが検討されました。

### ● 成果発表

本ワークショップの成果は学術雑誌『境界研究』や*Eurasia Border Review*などに特集号として投稿する予定です。